

8506 ノンフィクションの神髄は・・

ノンフィクションの真髄は「事実をもって語らしめる」ところにあると、よくいわれるが、この言葉は、ノンフィクションを成立させている二つの条理を、巧みに表現している。二つの条件とは、一つは、語るべき「事実」を発掘しなければならないということであり、もう一つは、その「事実」を読者の共感を得る形で「語らしめる」、つまり作品化しなければならないということである。

よいノンフィクションを書こうとするとき立ちはだかる壁は、何といってもこの「事実」を発掘することの困難さである。

柳田 邦男：事実を見る目

[許容訳例]

It is often said that the essence of nonfiction is to “make the facts talk”—a happy description of two conditions on which nonfiction is based. One is that the writer must unearth the facts to be told; the other is that he must make the facts “talk” so that he may gain his readers’ sympathy--that is, make nonfictional literature from the facts.

When one sets out to write a good nonfiction, the wall one is most likely to run into is the difficulty of unearthing the “facts”.

[翻訳例]

It is often said that the essence of nonfictional narrative consists in “making the truth talk”, a phrase that skillfully sums up the twin conditions on which the genre depends. The first of these conditions is that the writer should unearth the facts that are to do the talking; the second is that he should “make them talk” in such a way that they awake a response in the reader--in other words, that he should turn them into a work of literature.

The greatest single barrier standing in the way of whoever sets out to write a good nonfictional narrative is the difficulty of unearthing the “facts” in questions.
cion.

■ノンフィクションの真髄は「実事をもって語らしめる」ところにあると、よくいわれるが、この言葉は、ノンフィクションを成立させている二つの条理を、巧みに表現している。
(8506)

★「ノンフィクション」は nonfiction と訳すことができません。英語の nonfiction は、広い意味では、小説・詩・戯曲以外のすべてを言うので、ここでは nonfictional narrative とした方がいいでしょう。後を読めばどういう意味で「ノンフィクション(nonfiction)という単語を使ったかわかるので、許されるべきかもしれません。それから、ここでは一つ一つの作品ではなく抽象的な意味で使っているので nonfiction も nonfictional narrative も無冠詞で

す。

★ 「(ノンシクションの(その)) 真髓」は, the essence of nonfictional narrative です。
★ 「事実をもって語らしめる」に対して英語としてすぐ頭に浮かぶのは Let the facts speak for themselves(何も主観的なコメントを加えずに事実のみを述べればそれで十分だ)ですが、このまま使うと、後の方の「読者の共感を得る形で・・・作品化しなければならない」と矛盾することになります。したがって、let を使わないで作者の作為を示す make を使って、make the facts talk とした方がいいでしょう。しかし、「事実をもって語らしめる」の真意は、次に説明が加えてありますが、要するに「事実(facts)を発掘して、それを作品化し、なるほどそれが真実(truth)かと納得させる」ということです。ということは、「事実をもって語らしめる」の‘事実’には、明々白々たる事柄=a fact と、真実=truth の二つの意味が込められているということになります。ところが、英語では fact に truth の意味を持たせることはできません。そこで、英語の意味上の混乱を避けるために「真実に強いて語らせる」と考えて make the truth talk とします。

★ 「・・・ところにある」は A is B でも表現することが出来ますが、is では弱いので lies in ~とか consists in ~が「・・・ところにある」という日本語にぴったりと思います。

★ 「・・・とよくいわれる」は It is often said that…のほかに、～is often said to-Inf. も可能です。People often say…も間違いではありませんが、ここで people を使う必要はないと思われます。

● [が] (導入・同格)

「・・・とよくいわれる [が], ・・・」の [が] は「逆接」ではなく「話題導入」です。対処の方法は、and を使う、関係詞節にする、文を切る、コロンを使う、ダッシュを使うなど様々です。たとえば、

彼は駅前のアパートに住んでいます [が], そのアパートにはほかに八世帯が住んでいます。

He lives in an apartment house by the station, which is inhabited by eight other families.

He lives in an apartment house by the station, where [in which] eight other families have their homes.

He lives in an apartment house by the station, and there are eight other families there [in it].

「机の上に本があります [が], その中に英和辞典があったら持ってきてください。」

“There are (some) books on the desk. Please bring me an English-Japanese dictionary, if you find [if there is] one among them.”

我々は昨日田舎の道をジョギングしたんだ [が], 道はたいへんぬかるんでいた。

We jogged on a country road yesterday. The road was very muddy.

などのように、ここは「同格」でもあるのでダッシュを使ってもいいところです。

★ 「この言葉」とは、「言葉そのもの」ではなく「事実をもって語らしめる」という「言葉

が記述している内容」を指しているのですから this word はもちろん these words も駄目です。したがって、「この言葉」は a description とか a phrase を用いることになります。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(ノンフィクションを成立させている二つの条件)

「ノンフィクションを成立させている二つの条件」は「連体修飾節(ノンフィクションを成立させている) + 不定代名詞的体言(二つの条件)」なのですが、筆者の言わんとするところを考えると、「二つの条件が構成要素となってノンフィクションを成立させている」というのではなく、「二つの条件がととのっていればノンフィクションになる」ということですから「ノンフィクションがよりどころとする二つの条件」と考えます。すると、英語では「名詞(the two conditions) + 関係詞節(on which (successful) nonfictional narrative [nonfiction] is based [depends])」となります。なお、「二つ」は two の他に twin でもいいでしょう。また、nonfiction をくりかえさないで the genre としてもいいでしょう。

★ 「(この言葉は)～を巧みに表現している」は直前の言葉と同格なので、「(この言葉は)～を巧みに表現している言葉」と考えると「連体修飾節(～を巧みに表現している) + 不定代名詞的体言(言葉)」なので「名詞(a phrase)+関係詞節(that skillfully sums up～)」と書くことも出来ますが、これをさらに名詞句化して a happy description [phrase] of～とともに可能です。

■二つの条件とは、一つは、語るべき「事実」を発掘しなければならないということであり、もう一つは、その「事実」を読者の共感を得る形で「語らしめる」、つまり作品化しなければならないということである。(8506)

★ 「二つの条件とは、一つは、・・・」は「二つの条件の一つは」と考えて、The first of these conditions…とします。なお、The first…だけでもよいし One…でもいいでしょう。

★ 「語るべき「事実」を発掘しなければ…」における「事実」は、「真実(truth)」の原材料みたいなものですから‘fact’とします。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(語るべき「事実」)

「語るべき「事実」」の「語るべき」は「事実をもって語らしめる」と関連させると、どうしても「事実(そのもの)が語ることになるような事実」という意味にせざるを得ません。これは「連体修飾節(事実(そのもの)が語ることになるような) + 体言(事実)」ですから、英語に処理すると「名詞(the facts)+関係詞節(that are to do the talking)」となります。なお、the facts to be told は「語られる事実」で「語るべき事実」とは異なるので、厳密に考えるとちょっと問題がありますが、許されるでしょう。

★ 「発掘する」は excavate ですが、これを使うと具体的に「穴を掘る」というイメージが強すぎるので、ここでは unearth とか uncover がいいでしょう。英語の習慣として unearth は比喩的に使えるのですが excavate は比喩的に使われることはあまりありません。それから、この「発掘する」の主語は、言うまでもなく the writer です、しかも、この「語るべき事実」は「事実をもって語らしめる」と関連させると、どうしても「事実(そのもの)が語ることになるような事実」という意味にせざるを得ません。したがって、「語るべき『事

実』を発掘しなければならない」は「作者はおのずから語るような事実を発掘しなければならない」と考えて the writer must [should] unearth [uncover] the facts…とします。

★「もう一つは・・・」は the second…ですが, the other…も使えます。

★「読者の共感を得る・・・」は gain his readers' sympathy とも書くことができますが、厳密に言うと sympathy はどちらかというと「共感」より「同情」に近いニュアンスがあり、こここの「共感」という言葉はもっと広い意味があるように思われます。つまり「反応・共鳴・納得」に近いので awake a response in the reader とします。

●「・・・という形で」と「・・・するように」

「・・・という形で」は in such a way that they…が日本語に一番近くなると思います。ただ、日本語の意味合いとちょっと違うと思いますが「・・・するように」と考えれば so that they may [can]…を使うことも出来ます。

★「(・・・形で)「語らしめる」」は「作者は読者が反応してくれるような形で「その事実に語らせ」なければならない」と考えて, he [the writer] should 'make them talk' でしょう。

★「つまり」は that is; in other words などですが、「つまり」とは前の内容の言い換えですからダッシュで「同格」を表せばいいでしょう。

★「作品化しなければならない」の「作品化する」とは‘一種の文芸作品にする」ということでしょうから, he should turn them into a work of literature とします。日本語には「文学」という言葉はありませんが、「作品化」では literature という言葉を加えない意味がはっきりしません。他に he should make nonfictional literature from the facts という表現も可能です。

■よいノンフィクションを書こうとするとき立ちはだかる壁は、何といってもこの「事実」を発掘することの困難さである。 (8506)

★「よいノンフィクションを書こうとするとき」は「よいノンフィクションを書くことを目論んだとき」と考えて、一般人称 one を使って when one sets out to[aims to] write a good nonfictional narrative [nonfiction]です。なお、こここの「書こうとする」は‘動作’をあらわしているのではなく、‘意図’を述べているのですから try to write…などと言うことは出来ません。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(立ちはだかる壁)

「立ちはだかる壁」は「連体修飾節 (立ちはだかる) + 体言 (壁)」ですから「名詞(the barrier; the wall) + 関係詞節(that stands)」ですが、現在時制の関係詞節は現在分詞に変えることができるので、ここでは the barrier [wall] standing (in the way of…)と言い換えることができて、英文としてもこの方が自然です。たた「・・・とき」を「・・・する人に立ちはだかる壁」と処理するなら in the way of whoever set out to…ですが、「・・・ときの(障害)」と考えると when one sets out to…, the wall one is most likely to run into…となります。もちろん、この wall は日本語の‘壁’と同じように比喩的に用いるものです。

★「(・・・する壁は、)何といっても・・・」は「いろいろ考えられる中で最も大きな一つ

の壁[障害]は・・・」と考えて、The greatest single barrier standing...is..., とします。

★「この「事実」を…」とは「(いま問題にしている)その「事実」を…」という意味です。したがって、the “facts”に in question を加えると、日本語の「この」を表現することが出来ます。

● 「準連体修飾節+不定代名詞的体言」(この「事実」を発掘することの困難さ)

「この「事実」を発掘することの困難さ」の「ことの」は日本語の統語上必要な表現で、省いて「この「事実」を発掘する困難さ」としても同じですから、「連体修飾節(この「事実」を発掘する) + 不定代名詞的体言(困難さ)」とすると、英語では「名詞(the difficulty) + 関係詞節(we have [find] (in) unearthing the “facts” in question)」となります。これは Unearthing the “facts” in question is difficult. という内容を内包しているので、「動詞・形容詞由来の名詞 + of + 主語」(the death of his father (彼の父親の死); the outbreak of the world war II (第二次世界大戦の勃発); the difficulty of loving a neighbor (隣人を愛することの難しさ))の形で処理することが出来ます。つまり、the difficulty of unearthing the “facts” in question です。